

持続可能な未来へ

To the Sustainable Future

ブルースカイソーラー

2009年設立のスカイソーラージャパンを母体とし、23年4月に体制を一新。北海道から九州まで18拠点があり、再生事業の実績は100件（総発電量150メガワット）、5万2500世帯相当以上。維持管理を受託している発電所は約1400件という。維持管理でも重要な「草刈りと雪かき」を下請けに出す同業者が多い中、地元雇用を含めO&M（運用・保守）部の社員80人が直接携わっているのがブルースカイソーラーの強みだ。

近年は、太陽光発電設備の下で農業を営む「ソーラーシェアリング」も進んでいる。熊本県南阿蘇村では、地元の造園業者が営むブルーベリー観光農園と「共生」しており、同様の例がこれを含め全国に10カ所あるという。農地や耕作放棄地の有効活用策、地域の雇用創出という観点からも取り組みが注目されている。

【大木俊治】

太陽光発電は、再生可能エネルギーの中でも設備の手間やコストが少ないのが利点だが、放置すればやがて使えなくなる。そこで創業15年のブルースカイソーラー（東京都港区）が力を入れているのは「リパワリング」。経年劣化した太陽光パネルなどを最新機器に取り換えたり、新たに反射シートを敷設したりして発電効率を高め、長く使えるようにする。太陽光発電所の「再生事業」だ。

森林を切り開いた大規模施設が「環境破壊」と批判を浴びる例もあり、新たな土地開発は困難になりつつある。一方、東日本大震災

を機に設置が進んだ10年前

は約20年とされたパネルの寿命は、性能が向上した最新式では約30年に。発電効

率が30%近くアップした一方、価格は約5分の1にな

った。上原美樹・執行役員開発部門長は「事業用地は

そのままで既にあるものをより良くして長く使う。作

りっぱなだけでなく、（発電所全体の）メンテナンスを

しっかりして永続的に使っ

ていくという事業は、今求められていることではない

でしょうか」と話す。



熊本県南阿蘇村のブルーベリー農園の頭上に太陽光発電パネルを設置した「ソーラーシェアリング」がブルースカイソーラー提供